

全体会議 — パネルディスカッション —

信行会活動のすすめ

司会者 秋永智徳師（北海道東部）

助言者 鎌田行字師（愛知三河）

石井錬昭師（神奈川二部）

パネラー 第一分散会座長 原 顕彰師（北海道南部）

第二分散会座長 豊田正通師（千葉東部）

第三分散会座長 太田鳳苑師（愛知尾張）

第四分散会座長 古河良皓師（東京南部）

第五分散会座長 大島啓禎師（東京南部）

全体会議議長 中村潤一師（福岡県）

司会 第十七回中央教研は近年になく盛り上ったよ

うに思います。それぞれの分散会に入られた方々が、毎日の教化活動の中で切実な問題として真剣に取り組み、それぞれの会場で時間が足りないという問題が沢

山でございます。そういう点をふまえて、各聖の意見を座長からご発表いただきます。更に問題点については、実のある成果を是非生み出したいと思えます。忌憚のないご意見をいただき、遠慮なく助言者にも質問をむけて下さい。

原（第一分散会座長） 出席者の方々に信行会の在り方・組織をうかがいましたが、ほとんどの方は組織化したけど人数が集まらない。何年間かやっているうちに減ってしまい、やめてしまった。それは何故だろうか。私達が考えている組織化された信行会というもの、会を作ってから人を集めるという方向は間違っているのではないか。人が悩む場合、教師が応えていくうちにだんだん人が集っていく。そして自然に組織化されていく方が正しいのではないか。会は何のために、また宗教は何のためにあるのか、私達は何をしなければならぬか。それは救いを与えなければならぬ。そういうところからまとまった人達を集めて組織を作る。そういう逆の方向にもっていかなければならぬ。

し、信行会づくりの悩みは解決しない。根本から方向を変えていかなければならないのではないのでしょうか。

豊田（第二分散会座長） 十二名出席、助言者三名、

運営二名、座長一名という構成です。自己紹介をかね、現在どのように信行会に取り組んでいるのか、いろいろ問題点が指摘され、充実した分散会でした。どういうことを感じ、どう思っただけで位置づけるか、聞きましたことをご報告いたします。討議のポイントの①から⑩について細かく話し合われた。その中で信行会そのものをもっと自分の立場にたって、ただ檀家だけを相手にする信行会でなく、地域の中で育っていくような信行会や寺にしないでならない。そのためには、僧自身研鑽し、二十一世紀をみつめ、あるいは現実起こっている社会問題の結びつきの中で、法華経を通して教化していく姿勢を自分達の中につかまえないければならない、など活発に討論されました。細かい事は逐次ご報告していきます。

太田（第三分散会座長） 第一・第二の座長と話が重

なりますが、せっかくの機会ですので要約して話させていただきます。参加者十二名、プラス当日一名で、その中に昭和四十一年まで日蓮正宗寺院であった方がみえ、縁あつて日蓮宗に改宗された方がみえて大変参考になる話をいただきました。その方は昭和四十二年に橋場の長昌寺の高橋僧上の弟子となつて荒行に入行されたそうです。私は水をかぶっていませんのでこのことをいろいろ言うことはできませんが、多くの方が験者げんじやさんということです。成満の折には寺名と名前が貼り出されるそうですが、その方は住職名だけで、かつての日蓮正宗の檀家さんがクレームをつけ、いろいろ話をしたところ、檀家をあげて日蓮宗に改宗した、という発表がありました。そして住職は寺院経営のプロなのだから住職のやることについて来い、という姿勢をとつて引張つてきた。総代からクレームがついたこともあるが、話合つて収めてきた。また寺族と檀信徒の台所も分け、寺族の台所には、誰も入れない。青年会は「蓮の会」、婦人会は「華の会」というのを作っ

ています。時間の関係で後ほど話しますが、加えて信行会プラス、リクレーションをアレンジする事が必要ではないか、信行会に対して寺族の取り組み方はどうなっているのか、事例が三つ四つでしたが、時間の都合で割合し、後ほど説明させていただきます。

古河（第四分散会座長） 出席者九名、小人数のためか参加者は率直活発な、充実した分散会となりました。信行会活動については、何らかの形で参加者全員が信行会活動を行なっていました。それならば、信行会活動を取り組む上で当面している問題点、あるいは更に一歩深めて信行会の今後の在り方について話し合いました。いくつか挙げられた問題点として、教材についての悩み、リーダーの養成・育成についての問題などが大部寄せられました。多々、今後考えていかなければならないと思います。特に教材については、第四分散会として全体会議で要望事項として皆様に発表させていただきます。又、リーダーを育成することは重要であるが、住職とリーダーの責任の分担をどこで線引

きするか、具体的な問題もでてまいりました。又地方寺院と都市寺院の悩みもありまして、檀信徒の移動がはげしい地域もあり、信行会活動もなかなか定着しにくい、といった悩み、更に寒行や朝夕の勤行の太鼓の音も騒音とみられ、苦情が出るなど、地域における問題など指摘されています。又、檀信徒が何を求めて信行活動に参加しているかという点では、種々の意見が出ました。時には人生相談であり、家庭問題であり、社会問題様々であります。求めてくる内容は人生百般種々様々で、まさに人生相談そのものです。しかし現実には教師たるものすべてオールマイティに答えていくという事が望まれているが、経験の浅い若い教師にとつては、なかなか得手不得手という事もあるので、専門的に手におえない部分は、専門的に行っている人にゆだねていく、という方法も考えていくべきであります。いずれにしても、信行会活動は正しい信仰、正しい教えにもとづいた目を向けさせるよう、指導するのが大切であります。なお、後継者づくり、代がわり

の問題については深刻です。これについては種々提言もありましたが、後ほど発言させていただきます。以上、展望などございますが、後ほど発言させていただきます。

大島（第五分散会座長） 参加者十六名、自己紹介がそれぞれ信行会活動の実情を紹介していただきました。それぞれ地区の事情が非常に作用していて、ひとえに信行会であっても、その他の名称であっても、制約などによって思うように活動がなされていない場合、又特徴となつて活動されている例もあります。そのあと青年会の問題については、若い上人を中心として青年会を作りたいという声があがっているが、如何にして作るかという点、適切なアドバイスがでない。実際に成功した例は少ない。まず子供会からの掘り起こし、下地作りが大事であろうという結論に達しました。婦人会については、信行会でも同じですが、世代交代の問題、年寄りが寺にいつて、若い人が来ない。年齢別の改革の仕方というものの、この辺の工夫がある

という事です。信行会を更に方向づけるもの、集まつて来る人が何を求め、教師は何をどのように教化していけば良いのか、例えばいろいろ意見も出たのですが、通仏教的な教義、あるいは教えにともなつて、又、現代的な布教方法をとり入れる。そうした試みと、本宗独自の教義、あるいは信仰の関わり方、今ひとつはつきりしないものがあるのではないか。試みとして何でもやつていつて、きつかけに布教していくのが正論でしょうが、はつきりしないところが残っているようです。又、信行会を開いていない、あるいは開けないという教師もいらして、一カ寺一信行会というのが教研の趣旨ではあるが、必ずしも一カ寺一信行会でなく、数カ寺合同して地区で作つていく。むしろ地区の関心を集めやすく利点もあるのではないかと、という貴重な意見も出ました。もうひとつリーダー養成問題は、檀信徒講習会のような研修に信行会がメンバーを派遣させ、又信行会にもどつてリーダーとなる事もできる。更にそうした信仰的な問題だけでなく、寺を陰で支え

てくれるリーダーも大切にしていかなければならない、という意見も出ました。又、地域社会との兼ね合いもあるが、現代社会に信行会としてどのように対応するかとなると、日蓮聖人の理想とする立正安国・浄仏国土の成就に向けて信行を、信心がためというのではなく、外へできるだけ向けて活動する。これが信行会のひとつの要素として大事ではないかと思えます。

司会 分散会に共通する、それぞれの問題もあるようですが、昨日、現宗研でまとめたアンケートを聞かせていただきましたのによりますと、今日参加しているほとんどの方は、それぞれの信行会に携わっているようです。問題点は、若い人が集らない、人数が少ない、マンネリ化している、資料やテキストがない、というような共通した問題が多く出ています。満足しているというのは、わずか五件です。そのような信行の問題について、どのようにして我々の所願を浸透させていくかということを考えていくと、会場をまわって感じたことは、問題点は我々僧侶の側にあるのではな

いか、対象に対して壁にぶつかっていく、そういう問題の模索がなされているように感じました。各聖のご意見をいただきたいと思えます。フリーの討論をします。第一点、我々の側に反省すべき点はないか。

新井智昌（東京北部） ある寺で信行会をやっている住職がいうには、やっても片手間、実益があらならない。短時間で法事や葬儀で多大な収益がある。こういう集まりはうるさいばかりだ。こういう感覚が寺側にあるのではないか。私のところは、寺院・教会も一応あるが、寺院の立場でいうと、そういうことが出て来るかも知れない。私の寺は、じいさんばあさんが集まってどんちゃかやっているが、実益はあがらない。しかし楽しみでやっていただく。それとは別に、若い人を信行会として別な形で集めて刺激をさせるようにやっています。ところが教会側はあくまでも本命です。新興宗教と私共の違いはどこにあるか。新興宗教は命がけ、信行活動しかない。寺院は今迄反省がなかったツケが今まわってきたのではないか。葬式・儀式仏教な

どといわれる前に深く反省するいい機会である。真剣に命がけで。祖師日蓮大聖人は寺を建てようとか、土地を寄付してもらおうとか、墓地を管理することも関係なかったのである。日蓮聖人の原点にたち戻って、もう一度布教をよく考えることが大切であると思います。

司会 その他のご意見は？ 分散会の中で特に目立った発表をなさった各聖をご紹介いただき、それぞれの意見を発表していただきたいと思います。

大島 檀信徒教化と関係して如何にして人を集めるのかの問題について、大阪の佐竹上人がきめ細やかな教化活動についてご報告がありましたので、どうぞ。

佐竹貫龍 (大阪市) 大阪から参りました時は、農村的なところに寺があり、二十六年経ちますが、入った時は、先代からの檀家名簿等の引き継ぎもなく、寺の囲りは八割以上が門徒でした。その中で日蓮宗の教義を広げるのに、若い二人でいろいろやったがうまくいかない。中央教研、教区の教研会議などに出席し、地

域に合うものを真似てやってみましたが、先ず郷に入れば郷に従えで、農村の年寄と親しくなること、又、上からみるのではなく、相対づくで対処する。通仏教的なやさしい話で寺になじますというように、いろいろやって来ました。先ず、檀信徒と村の人と一緒に話合おう。一番いいのは団参、いまだに続いて三十五回目です。師匠は坊主のウラをみられるからと反対でしたが、寝食共にして、坊さん、話がわかるということになってきて、村の人は、門徒ではあるが護持会員になって菩提寺以上に寺に協力的です。その中で等外から二十二等までになり、二十六年間頑張って来ました。

豊田 今の話に関連したのですが、第二分散会助言者の石井上人が的確にご指摘いただいています。先ず、私達が疑問に思うことは解決しなければなりません。それには、我々はもつと日蓮聖人の色読なさった法華経の体験を自分達のものにしっかりと汲みとらなければならぬ、とご指摘なさっています。

石井(助言者) 信行会というと、一つの会のように思っておられるようですが、皆さんがやっておられる法要も信行活動です。そしてあらゆる寺で行っている事、全部信行活動です。そうした点で要になるのは、住職・寺族であると思います。ここいらが住職の考え方も変えていかないと、檀信徒と触れ合っていくのに大きな問題点があると思います。皆さんは住職歴が長い方ばかりで、私は五十歳近くなって寺に入ってみて、葬式と法事のない宗教はないものかと考え、何を寺でやっていったらいいかと掘り起こすことを考えました。初めは、「皆と学ぶ会」を作りました。はじめは非常に少なく二、三人、だんだん人が集まってきて信行会を作りましょうということになったが、檀家の一定の人しか来ない。妙伝寺の名を使うから駄目なのではないかと妙友会としたが、第三者の未信徒が入ってきたりで、またつかかか。教師が教えるためには、勉強をしなくてはならない。幸か不幸か、私は二度倒れて五年間死と対決して法華経を自分なりに読みました。自

分が疑問を持っているうちは、引っぱっていくのはむずかしい。一つ一つ解決していく上に、「信行の集い」が持たなくてはいけない、と出発点で中味を考えましたが、頭でつかちの議論ばかりで、これが第一回目的つまりきでした。第二回目は、人が集まらなかった。私の門戸の広げ方が悪かった。第三に今考えていることは、お題目中心にした形の信行会をもっていきたいと思っています。

都龍張(鳥取県) 信行活動の集まりにどんな問題点がありますかという司会者から、教師側にあるのではないかとの投げかけがありました。それに対してずばり発言がほしいのです。経済面ばかりでなく、ヒマがないという地域もあると思います。例えば大阪の場合、月参りを省くと、どうにもならない。名古屋地区もそういう影響があるのではないのでしょうか。また月参りの活用の仕方もあると思いますので、違った面で関西の方からのご発言があれば、参考になると思います。

司会 問題点を我々の側にもどして、マンネリ化している、停滞している原因は何か。我々の考え方が、寺院の教化活動する場合の実務面にあるのか。ご意見をおうかがいいたします。

新井貫厚（東京東部） 教研の場合は全国から集まるということで、都市部・農村部とかの地域差の問題もあるが、先ほど申したのは、都会寺院の悪さが出たのではないかと思えます。日曜日は法事だけをやっているだけというのになると、信行会は面倒なものになる。更に若い人が集まらない。我々が接触する場合、高齢者の人が多く五十代から七十代のお年寄です。その間では対話、コミュニケーションができ、住職と檀家のつながりもできる部分がある。教師の姿勢にも関わってくるが、壮年層をみると、主人は仕事、奥さんは子育て、姑・主人の世話と、信行会にいつ真剣に取り組んでくれるのか、又我々が勧めてもおぼあちゃん年代になったら、今はとりあえずといいわけをされる。若い人達は外的条件で、それなりに充実した生

活を送っている。特に問題点を持っている人に接触すれば道が開かれるが、そのあたりの周りの檀家のおかれていた環境の中から若い人を集める。その辺で我々が環境条件をふまえて、なおかつどういう形で取り組んでいるのか、というのが一つの問題ではないか。具体的に若い人達に取り組んでいるのだという方のご意見をおうかがいしたいです。他に集まらない原因があれば、うかがいたいと思えます。

司会 鎌田上人に人集めの極意について。

鎌田（助言者） 寺に入って十一年です。六十二から七十四歳まで経験も少なく、むしろ教えていただきましたが、信行会づくりについては、信仰とは一人からはじまるのだから、集いの中で一人でも信仰する人がいれば喜ばねばいけないと思えます。信徒にむけての姿勢ですが、教化するというのではなく、教化される立場になってやれるといい。多い少ないの問題でなく、質の問題だと思えます。一人でも真面目にやられる方がいれば、その人を拝んで、その方によって輪を広げ

ていく。私はゆっくりかまえてやってきました。マンネリ化という事は信仰にはありえないというお話がありました。ありがとうございました。

古河 人集めについて、第四分散会のご意見が出ましたのでご報告いたします。信徒をどのようにして集めるか。一つのパターンとして、悩み事や不幸をはじめとしてありとあらゆるきっかけをつかむ。一言でいえば、誕生の命名から戒名までのつきあい。ありとあらゆる人生航路の中できっかけがある。それを教師がみぬいてつかんでいく。教師の努力として新しいテーマを設けて参加しやすい態勢を作る。寺でも常に目新しいテーマを設けて取り組んでいくということが必要です。昔は、歌題目など娯楽と信仰が結びついていました。しかし今はそういった形がない。信行会活動を活発にするための潤滑油として、教理・教学とは別に寺にも気軽な楽しみ、リクレーションとして年中行事のあとのカラオケ・フォークダンスなど従来の信行会活動には欠けているものがあるのではないかと思ひ

ます。あくまで教えを広めるということですので、本末転倒になつては困りますが、とこのような発言がありました。

司会 焦点は信行会活動をどのようにして作るか、人を集めるかについて、ご発表下さい。

太田 第三分散会でユニークなお話をした方があり、交通事情などの関係で早退なさつたので要旨を伝えます。信行会・信徒の集め方ということですが、その方は住職の同窓生を発起人として青年会をこしらえた。代表世話人は人望厚い方をあげて組織して、厄除け祈願などには、青年会は「はずの会」と申してご奉仕されている。奉仕のあとは家庭円満・夫婦和合を説くこと、この指導を徹底してやる。女房側もいいところへ出た、又次回にもいらつしやいと協力してくれる。加えて一方的ではいけないと、奥さんを誘うためムードよろしくピンクの紙をつかつてスポンサーやオーナーをこしらえて引っぱり出す。集まつた人には、一日目は行衣を与え、二日目には記念品をご宝前に供えた後、

祈禱して渡す。法要の後、信行会で疲れましたかとたずねると、疲れていないと皆が答える。ということは何が落ちていないから来年また来なさい、と引つぱる。女は三十二、三十三、三十四、男は四十一、四十二、四十三を対象に催す。なおかつ寺内にスナックを設営して、いつでも簡単に召上つて帰れるような雰囲気になっている。スナックには檀信徒・信行会のメンバーだけでなく、時には市長・市会議員・警察署長なども出入りし、その中でコミュニケーションを図っている。皆さんに話をきくと、寺に出入して良かったといっている。そこで必ず住職は家庭円満・夫婦和合を説くそうです。代つてご報告いたしました。

司会 ただ今、ユニークな人集めをしているご発言がありました。一人から輪をひろげ数千人まで広がっていくには、底に流れるものは何かあるのかを、ご披露お願いします。まず、鎌田上人、どうぞ。

鎌田 前に戻りまして、人はどうして集まらないかの前に、現在は核家族が多く、そういう家族の実態を

つかむ必要があるのではないか。結婚して大体七年目に子供が小学校に入り、中学に入り、高校に入っている時と、家庭の危機は一代で六、七回あるのではないのでしょうか。資料を持っていませんが、こういう中で例えば、現在の子供は親子の触れ合いがない。夫婦共働きが多く、お父さんは寝顔だけ、話合ったこともないし、抱かれたこともないし、何か買ってもらったこともない、という子が多いです。お母さんは仕事に出ている、おばあさんに育てられた子もいます。こういった実状を把握して一つ一つの家庭に入って触れ合いがなければ、信仰を深めるのは困難だと思います。私がおもうには、家庭を円満にしていこうとすると、どこの家でも昔も今も同じで嫁姑の問題、親子の問題が多いので、そこで裏づけする言葉はないかと考えたが、お互い前世において親子だったのだと話します。それには仏の心が最も大切なのですよ、というような、生き方の上で接点をどこに求めるか、言葉だけの和合でなく、内容がともなっていないとではならない。いつも

私は木に例えます。根は親、幹は夫婦、枝は子である。親との縁を切つて幹が栄えるか、根をくさらしてはいけない。不幸な子を自分が作ったのだから教えという肥料を作つて、若い夫婦が育つように、その子供が葉を繁らし木の実をつけるようにして下さい。これが仏の心だと思ひます、というようになつてしまつたというのが、現実です。教えは理屈でなく、人と共に泣くということもありましょうが、共にできないと人を導くことはできない。それが教師だと思ひます。自分の知ることとは全部教えて、自分は常に指導者のような立場にあるということがいいと思ひます。未熟ですが努力しています。

司会 私共の基本の姿勢の原点がどこかにあるようなお話をして下さい。石井上人、姿勢についてお話し下さい。

石井 皆さん、信行会というどういふメンバーが集まつているかという、大体女性が多く、時には百パーセント女性ということもあります。男性は一人か

二人、入つてもいいですか、という位入りにくい。女性が対象で進んでいるので仕方ないと思うが、NHKの宗教意識調査に出ましたが、今の日本人の宗教意識は、宗教に対しては否定的、半分は駄目。アンケート調査の結果をみますと、信仰とは、①古くさい、現代人のやることでなく、年寄りのやること、②自分の心の問題なので、他人にすすめたりするものでない、③団体・集団に属して強制されるのは嫌だ、④悩み・苦しみ、欠陥者のやることで、まともな人間のかかわることではない。たしかに、困つたり悩みがあれば寄つてくるというのは、否めない現象です。こうした形、悲しいことで寄つてくるのでなく、しかしこれもまた寺に集める一つの方便です。これをどう導くかが、私共の仕事だと思ひます。それでは、全部満足して来ているかという、そうではなく、判つたような判らないような、でも何か考えさせられるのではないかと思う、という。やはりそういう点を求めながら触れ合つているところに、信行というものが進んでいくのでは

ないかと思えます。ところが、鎌田上人のようににはできませんが、宗教的体験というか、自分の通ってきた人生のどこかに、一片持っているものをぶつつけると、納得する人間が多いのではないかと思います。そうすると、あそこにいけば何か聞けるのではないかと、人が集まっています。私はそういう形で人を集めてきました。月々の題目講・信行会は三十から五十人の線はできますが、行学というか、学んで自分が身につけようと集まってくる人は二十人位で、枠がなかなか広がらないというのが悩みです。坊さんは、指導はできるが会の運営は下手なので、皆が一人一人つれて来て広がっていくのだ、坊さんには力がないのだからといまます。坊さん一人でやろうとするからマンネリになる。作り方の中味を自分一人だけでなく、他人も入れて好みにあった魅力あるものに、二、三年に一回ぐらい変えていかなないと、マンネリ化はげしくなると思えます。その点だけちよつと申し上げます。

司会 時間が余りありませんので、問題を深く掘り

下げることはできませんが、せっかく二人の助言者から、それぞれの立場でご意見を述べていただきました。信行会の育成について、問題点があれば、ご意見、また助言者に対して反論があれば、どうぞ。

新井智昌 まことに前世の因縁という解き方は、一般の人には納得させるのにいいのではないかと思います。私、智・情・意といつて人間には三つあると思います。日本人の縁ある心で、情の心で布教するのは大事な事である、とある講師の方から聞きました。智慧でいきますと理屈っぽいようですが、一念三千の理論では救えない。情で気づかせるところに釈迦の本物があるのではないかと。若い人達がどんな人相をもつて寺に来るのか。寺で有形無形で与えるものがある。有形ではリクレエーション、信行用テキスト等を与え、無形では社会的不安、家族関係で納得できないという時、無形で与える。布教の面では、今のところ日蓮宗では、個々別に研究はしていますが、先ほどのような具体的に判るような説明をする。私も木に例えて説明をし、

人の力と霊と共に自分が努力をするというように話します。判りやすいように個々別の努力をしています。こういう機会に集積して、身延教研の時にいただきますでしたが、集めて提供しようというのが、無形のものをうまく利用する方法だと思えます。

豊田 古河上人の意見の中で関連いたしましたして、第二分散会で昨日出ました話の中で、福岡県で若い僧五人ほど集まり、テレフォン説教を始め、資金援助として年間千円、六百人の会員を作り、年二十万の利益がある。五年で百万計上し、年二回講師を呼ぶ。こういう報告の中で、私達が何らかの形で信行の行動をおこせば、有形無形で外護はつくのだという報告をいただきました。又、法華クラブの若い社員の研修の事例も出されました。今日の議長の中村上人に発表をお願いいたします。

中村(議長) 私のテレフォン説教の例から説明いたします。五軒の寺がチームを作り、テレフォン説教の会を始めました。準備するお金は、テレフォン機十五

万、電話機一本で計二十万でできるわけです。しかし説教を流してもお金にはなりません。誰が聞いてくれるかもわかりません。そこで放送した話を半年に一回パンフレットにして「テレフォン説教友の会」を作り、五軒でわけて六百から七部を檀家にお願ひし、一冊千円でお願ひする。これを次回の資金とする。その時、自動的に会員として登録される。お金は六十万から七十万集まります。パンフレット三十万、あとの三十万については、十万ずつ春秋の講演会にあて、足りないところはその寺で出していただき、ただしあがつた一切のお金は寺に差し上げる。後の十万は通信費とします。大体赤字にはなっていない。五年で百万の積立金ができ、百万をもとに百話を本にして自分達の寺以外にも購入してもらい、内外共に理解者を加えています。その間、春秋二回研修会を行い、生の声なまで五人の若い僧と一つのテーマのもとに一般参加者と共に講義をする。好評です。福岡県で指折りになったと、資質向上にもなっているわけです。自分の檀家という

意識を、日蓮宗の宗徒であるという意識に高めていくというのが、何より必要だと思えます。法華クラブの

社員教育を私の寺でやったのですが、日蓮宗に縁がない人がほとんどでしたが、教育係がいう言葉の中に、題目やお経をあげるのも仕事のうち、それに対して給料を払うのです。これは強いと思えました。社員は強制的に何でこういうことをさせるのか、と。ところが何も知らないから拒否反応をおこすわけです。クラブ創立者小島愛之助様がやった事業は、すべて法華経の精神にもとづいている。会社のために働くというのは自行化他だと教え込む。教えにもとづいて働いているから自分の仕事に興味づけ、価値づけと、精神的バックボーンができてくる。四日の間にいい職場にきたと、未信徒の社員に素直な心ができてきて唱題するようになる。我々坊さんは、若い人にいうのは抹香くさくて、抵抗があつて、心の枠をもっていて、とび込めないでいる。若い人に語りかけるだけの法華経は、宗祖も釈尊も用意して下さっているのにもかかわらず、先祖供

養しか坊さんの方が利用しきれないという現状を打破しなければならぬと思えます。

司会 ありがとうございます。たくさん事例をお持ちと思いますが、時間が限られています。その点を踏まえて、今回の分散会の中で、我々は信行会活動を、しっかりと真剣に取り組んでいくために宗門に対しての姿勢を持つて欲しい。また我々の反省、その他こういう姿勢でありたいという各聖から要望が出たと思います。座長さんからまとめてご発表下さい。

古河 第四分散会としての要望、教材に関するいろいろな意見が出ました。信行会活動にはテキストが必要です。例えば、宗門の『信行必携』が用いられている数は圧倒的に多いが、この後は何を使つたらいいのか、『日蓮宗読本』はむずかしく難点がある。ご遺文講義、法華経講義も苦労してピックアップし、コピーして自分でテキストにしている。『僧風林読本』はわかり易いので信行会活動で使用できるだろう。その他青年会で作成したものなども使い易いものもある。教材はいろ

いろあるが、いざとなるとなかなかないのではないかと
いうのが、実状のようです。しかも法華経・ご遺文
の教義解説というのが出ていますが、具体的現実的な問
題、例えば親子関係、嫁姑問題、社会的問題として安
楽死、死の判定などの時事問題、そうした様々な問題
に対して、法華経や日蓮聖人の教義をもつて解説して
くれるようなものがないのではないか、というわけで、
第四分散会として次のような要望が出されました。法
華経や日蓮聖人の教義が家庭問題・社会問題などの具
体例に則して解かれ、現実の問題に伝えてくれるよう
なものを現宗研で編集、出版してほしい。同時に現実
的な教義・教学との関わりという具体例をピックアップ
プしていく必要性も感じられる、というわけです。そ
れから信行会の今後の展望として宗門的な課題のひと
つとして、地区・管区・教区の、ひいては身延山研修
道場などに回を重ねて研修を受けた人の扱いについて
どうするか。信行会活動を進めていけば、必ず研修に
参加してリーダー養成なり、信仰増進をうける方向が、

今後とられていくのではないかと。それに対して大阪の
神谷上人よりご指摘がありましたので、どうぞ。

神谷行宏（大阪市） 第一に、我々が発心いたしました
たことをくり返していただきたい。教師の内面的な話
がでしたが、私の友達に禅宗の坊さんがいました。
四・九の日に頭をそる事をくり返しています。我々は
大体世襲なので発心したことがない。不惜身命になれ
ない。今日、集まっていられる方は発心していただき
たい。大阪市管区では、布教師会が檀信徒一泊研修会
を行っています。今年五回目を数えます。今月末、近
畿教区は妙顕寺に二泊三日の研修会を行います。これ
は、各地区の研修会を経た人が寺院住職の推せんで参
加するのですが、教区の教研を経た方が身延山の研修
にいく。こういう人達を宗門ではどのように迎えられ
どのようなリーダーに仕立てていくのか、現宗研なら
びに宗務院の今後の措置の指針をかためてほしいと思
います。それによって我々も檀信徒にこのようなこと
があるので研修会にいきなさいと勧誘の方法があると

思います。最後に、発言の機会を与えて下さりありがとうございました。我々が坊さんになったということをごさいます。様々の問題の基点ですので、それがなければ、何宗の僧侶かわかりません。自分に対して再認識をしていただいたならば、この研修会の大きな成果があると思います。

久古教保（東京西部） 第四分散会に対して反論ではないのですが、我々の姿勢として、現宗研・中央に要求するのではなく、自分達が管区でまとめて積み重ねて、その中から現宗研でまとめていく、という下から盛り上っていくような姿勢が大事だと思います。

司会 これは、私共長年取り組んできた教化センターの必要性の問題だと思います。それが現実には下の声が宗門に反映し、その声が全教師に伝わるような姿勢こそ、宗門の今後の態勢でなければならぬと思います。先ほどの信行会の問題について、石井上人からご説明いただきます。

石井 テキストの問題が出ましたが、「日蓮宗信仰読

本」のゲラが出来上りまして、十月末、三百頁の本が産声を上げます。皆さんの期待にそえるように具体的な問題、「私達と宗教」「私達と法華経」「私達と信仰」とお題目、「私達のお寺さんそして日常生活」「私達と日蓮宗」すべて「私達」に結びつけた形で内容がとり入れられています。又、「日蓮宗読本」という簡単なものも来年できます。お使い下さい。研修道場を出た人の扱いについて、私のところも約七十名出したのですが、初め一つの寺で十名以上出さないと核にならない。リーダーは核をつくって何とか活用しようと作りましたが、宗門として活用する場には、統一信行とか、護法大会とか、護法特派布教など参加して喜び、寺も奉仕の形で活動しています。この七十を有効的に再活動させるためにブロックの主力にと考えています。出された一人二人の方で、皆さんで宗務所内でまとめて活動できる方向づけをしてほしいと思います。私は、研修道場に三回参りましたが、そこで熱心にびっしり仕込んだのは使えます。昨日から活性化するためにどのよ

うにしていったらいいのか、豊田上人にやっていただいて出た内容から拾ってみたのですが、①基本にはお題目である。題目で救って喜び、喜んだ者がまた救う。そうしないと信行会は伸びません。②教師と宗徒の姿勢、先ほど来、皆さんに申し上げるまでもありません。③法華経を日蓮聖人の教えを私達が実行することは、勉強する、修行する事である。やはり「勉強会」「信行会」を作ることは、大切だと思います。その中に、「話合える会」を持つことが悩みの解決につながる。④檀信徒の中に核を作らなければならない。それがリーダーであると思います。住職は檀信徒と共に自信をもって活動すること。⑤何故、今の檀信徒は積極性に乏しいか。勉強・経験不足、だから自信がないのです。宗徒が宗徒へ、宗徒が未信徒へと布教する指導ができるリーダーを作ってほしい。増上慢でなく、坊さんの手足になれる人を作って欲しいと思います。⑥寺が魅力あるということは必要だと思います。住職が対社会的方向に積極的に働きかける努力をすることが、寺の値

打ち、住職の価値もあがってくると思います。⑦宗門行事については、ブロックでやるものには檀信徒一人自分の心の研修にいくのだと、住職が勧誘していただきたい。自分の寺にだけいたのでは良い檀信徒はできません。⑧信行会のブロック化と集団化が必要である。一カ寺では弱い。組寺の信行会、管区・教区の信行会を組織化して統一信行とか、護法特派布教とか信行会が生きてくるのが活性化することだと思えます。そして信行会の集団化、これが宗門の信行会の将来をなう十年後の発展を築くものと思っています。昨日、いろいろ話が進展しました。すばらしい信行会作りがなされたと思います。

古河 先ほど、久古上人の発言に対して、何でも現宗研・宗務院に要望を出そうという雰囲気の中で、四分散会から出たのでなく、こちらの資料の中に、「信行会活動についての当面する目標」というのがあります。現宗研として、今後信行会活動の方向づけをしたものと聞いています。信行会活動の内容としては、

①唱題修行、題目の意味及び功德の普及、②法華經・ご遺文の習学、③人生・身上相談、④寺院および地域社会における信行の実習、⑤日蓮宗徒の異体同心と拡大等にある。これらの点をまとめた信行の手引きを作成し、その活用を目指す、とありまして、展望としてのせられていましたもので、手引きが作られていくならば、教義の解説ばかりでなく、現実の問題に則したものを、もり込んで欲しいというのが、分散会での討議の趣旨でありました。私の言葉が足りませんでした。誤解のないようご理解下さい。

司会 只今の座長さんのおっしゃった通り、皆様の手元に資料として「信行会活動についての当面する目標」「信行会活動の三段階の目標計画」の試案が届いています。帰えられましたら充分に検討していただき、一歩前進するように私共も努力したいと思っています。最後に、時間もございませんが鎌田上人より一言、どうぞ。

鎌田 先ほどから結構なお話が続いておりますが、

私の反省としてお話しいたしますと、テキスト・教材についてお話しがでていますが、一般社会をみましても、その人が自ら苦勞して体験から作っているわけです。人のものは基本であって、あくまで参考にして、資料は自分が檀信徒と触れ合いながら作っていくのが望ましい。私自身反省しながら努力している次第です。

司会 予定された時間がまいりました。残念ですが打切らせていただき、議長の方から提言がございます。

議長 司会者・パネラー・助言者の方々、大変ご苦勞様でした。又参加者の方々もお疲れ様でした。第七回中央教研参加者一同として何か宣言しようということになりました。手元に用紙があると思います。宣言として井藤上人の方からお願いいたします。

井藤太然 (岡山県) どこまでも案です。

宣言 (案)

宗門は宗徒総弘通を目指し、前進しようとしている。この時に当り、伝道の拠点たる寺院は、その実を挙げるために具体的な方策として信行会づくりと、

信行活動の充実こそが最も急務であると考えられる。「生き生きした信行会活動について語り合おう」という統一テーマのもとに参加した我々は、このことに深く思いをいたし、立教開宗七五〇年に向って精進することを誓いつつ左の条項を確認しあつた。

①立正安国の祖願を広め、現代に生きる信行会づくりに目指していこう。

②本化沙門の使命を担って生き生きとした信行活動の輪を広げていこう。

③宗徒弘通の実践の第一歩として一カ寺一信行会を実現していこう。

参加者一同、右宣言する。

昭和五十九年九月七日

第十七回中央教研会議参加者一同

議長 原案です。結論として採択していただけますでしょうか。

新井智昌 異議あり。宗徒弘通というのは問題が多いのではないかと。宗徒以外にも弘通するのが私達の使命で

あり、この会議で検討して変えていくのが、会の本音だと思います。

井本学雄（兵庫西部） 解釈をとりちがえていられるのでは。私達が宗徒だけに弘通していくという意味でなく、教師が宗徒と共に対社会に向って、いくなれば未信徒に向って、僧俗が一致して弘通をしていこうという受け止め方をしています。

議長 よろしいでしょうか。採択するかどうか、拍手で決めていただきます。

久古 前進しようとしている、という表現は弱いのではないのでしょうか。前進している、と断言した方がいいのではないのでしょうか。

議長 前進している、という方は拳手をして下さい。過半数により、「前進している」と変えます。以上、閉会式に移ります。

第十七回中央教化研究会議参加者

信行会アンケート集計結果（総数七十七人）

I		II	
あなたの寺院では、布教教化のための組織または集まりがありますか。（複数回答）		信行の集まりでは、どのような内容の教化を行って いますか。（複数回答）	
一	信行会の名称で行われているもの	37カ寺	
二	題目講	36カ寺	
三	祈禱会	24カ寺	
四	婦人会	23カ寺	
五	子供会	5カ寺	
六	青年会	11カ寺	
七	老人会	3カ寺	
八	その他（ハッピーロータス・唱題の集い・御遺文講座・写経会・早粥会・テレフォン説教の会・旅行会・史跡研修会・生活相談・妙見講・彼岸の集い・団参・和讃講・朝参り会）	23カ寺	
一	読経	62カ寺	
二	法話	60カ寺	
三	唱題行	51カ寺	
四	祈禱	35カ寺	
五	御遺文研修	19カ寺	
六	リクレーション	18カ寺	
七	視聴覚	11カ寺	
八	その他（団参・まとい練習・法華経講話・釈尊伝・和讃・先祖水子供養・朝粥・テニス・体験発表・時局解説）	18カ寺	
（イ）	信行の集まりの回数ほどのくらいですか。（複数回答）		
	月1回	39カ寺	
	月2回	10カ寺	
	月3回	7カ寺	
	月4回	3カ寺	

IV

集まりには平均何人ぐらい集まりますか。(複数回答)

一	11人〜20人	27カ寺
二	21人〜30人	19カ寺
三	31人〜50人	15カ寺
四	10人以下	9カ寺
五	50人以上	6カ寺
六	100人以上	6カ寺

V

集まりにどんな問題点がありますか。(複数回答)

(ロ)	月6回	1カ寺	一	若い人が集まらない	33カ寺
	年1回	3カ寺	二	人数が少ない	20カ寺
	年2回	2カ寺	三	マンネリ化している	20カ寺
	年4回	1カ寺	四	資料やテキストがない	15カ寺
	年5回	1カ寺	五	暇がない	9カ寺
	年6回	3カ寺	六	満足している	5カ寺
	年9回	1カ寺	七	その他(人数が少ないのもよい・さらに飛躍させたい・会員倍増をめざす・新しい人が増えない・横に拡がらない)	5カ寺
(ハ)	毎週	3カ寺			
(ニ)	毎日	1カ寺			
(ホ)	随時	7カ寺			

(昭和五十九年九月七日実施)